

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：32682

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720119

研究課題名(和文) 中世唱導資料の総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive Studies of Medieval Works of Preaching

研究代表者

牧野 淳司(MAKINO, Atsushi)

明治大学・文学部・准教授

研究者番号：10453961

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円、(間接経費) 750,000円

研究成果の概要(和文)：日本の唱導でもっとも重要な流派の一つが、安居院流である。各地の寺院や文庫には、安居院流の唱導資料が数多く残されている。なかでも『転法輪鈔』は、安居院流の中心となる資料であり、法会の趣旨を述べた表白を多数、収録している。本研究では、これらの表白が作成されて、地域や宗派を越えて流布したことの意義を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：One of the most important schools in Japanese Shodo(the sermons delivered by the officiating monk from a pulpit at a Buddhist assembly) is the Agui school of preaching. Many books of Agui school are kept in the temple and the library in Japan. Above all, Tenporinsho is the most important works in the Agui, and a lot of hyobyaku (pronouncements stated the purpose of a Buddhist assembly) is contained in it. In this study, I clarified the significance of these books of Agui having spread across an area and a denomination.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：国文学 中世文学 唱導 寺院資料 平家物語

1. 研究開始当初の背景

近年、日本では寺院資料の調査・研究が大きく進展している。醍醐寺や金沢文庫保管称名寺の文書・聖教が国宝や重要文化財に指定されたのは長年にわたる調査・研究の結果である。名古屋大須の真福寺や、河内長野の金剛寺などでも聖教調査が進み、各種の報告書が公刊されている。その他、多くの寺院でも同様に調査研究が展開している。このようにして見出された寺院資料の価値は国文学の世界でもますます重視されるようになってきている(『中世文学』56号に、シンポジウム「寺院資料調査と中世文学」の成果が掲載されている)。また、海外においても日本の中世仏教への関心が高まっている。各地寺院に残されている膨大な資料群が、これまで知られていなかった宗教世界を開示するものとして注目を集めている。

このような寺院資料のうち、中世文学との関係性がもっとも密接であるのが唱導資料である。法会儀礼は、文学をはぐくみ育てる場であったことが明らかにされつつある。しかし、唱導資料の全体像はいまだ不明で、未紹介の資料も多い。そのような状況の中で、これまで活用されていない資料の研究と紹介を進め、中世における唱導資料の文化史的、文学史的価値を総合的に把握していくことの意義が高まっている状況があった。

2. 研究の目的

(1) 本研究においては唱導資料の価値・意義を明らかにすることを重視する。そのために、未だ紹介・活字化されていない唱導資料を翻刻し、解題的、注釈的研究を付して公刊することを継続的に行う。国立歴史民俗博物館所蔵の『転法輪鈔』や、金沢文庫に保管される唱導資料を紹介し、それらの資料的意義を考究する。

(2) 唱導資料の全体像を把握するには、これまで公刊・紹介された唱導資料の整理・分類が必要である。多様な唱導資料を、内容および儀礼との関係性を基準にして一覧化し、その唱導資料の残存状況を調査する。また、それらの唱導資料に関係する研究文献を収集しつつ、研究の全体的動向を把握する。同時に、唱導資料は、法会儀礼全体の中でその位相を明らかにされなければならない。法会儀礼やそれに伴う芸能との有機的連関の中に唱導資料を位置づけることにより、唱導を含む寺院での文化活動の特色を明らかにする。

(3) 中世文学における唱導資料の意義を追究するために、『平家物語』と唱導との関係性について考察を進める。各巻・章段ごとの注釈的研究を行いながら、成果を論文として発表する。唱導・儀礼・芸能の記憶を吸収した文学として『平家物語』を眺めていくことで、これまでとは異なる文学史を構想するこ

とを目指す。

3. 研究の方法

日本中世の唱導資料の全体像を捉え、その意義を考究するために、以下の3側面からの研究を推進する。

(1) 各地寺院・文庫の唱導資料についての調査・研究を行う。これは本研究の基盤・土台となる作業で、唱導資料を多く所蔵する寺院・文庫の調査を行い、できるだけ多くの唱導資料の翻刻紹介と解題的研究を行う。これにより、唱導資料の新たな価値が提示できるはずである。

(2) 既に紹介されている唱導資料の一覧化と研究文献目録の作成を行う。各種資料を収集しつつ、関連文献を洗い出して行うデータ蓄積作業により唱導資料の全体像を見渡すことが可能になる。

(3) 『平家物語』と唱導との関係性に関する注釈的研究を行う。『平家物語』を具体的研究対象として、中世文学にとっての唱導の意義を追究する。

4. 研究成果

(1) 安居流唱導資料の一つである国立歴史民俗博物館所蔵『転法輪鈔』(全4帖)の翻刻と解題作成を進めた。それに伴い、永井憲憲氏所蔵本『転法輪鈔』(国文学研究資料館所蔵マイクロフィルムによる)など、関連する安居院流唱導資料の調査を行った。永井氏所蔵本には歴博本の第1帖・第3帖と同一内容の表白が含まれていることを確認し、本文の検討も行った。その結果、永井氏所蔵本には誤写が多く、鎌倉時代写本である歴博本の本文のよさには及ばないが、歴博本の本文校訂に使用できることが確認できた。歴博本の翻刻と解題は国立歴史民俗博物館から発行される研究成果報告論集に掲載して公にされる予定である。『転法輪鈔』は安居院流唱導資料の基幹部分を構成する資料であるが、その全貌はいまだ不明の点が多い。また、歴博本は分量は少ないが、すでに公刊されている金沢文庫保管本とは重ならない新出の表白も含む。歴博本は存在は知られていたが、これまでほとんど活用されてこなかった。翻刻が公になることで、文学分野のみならず日本史・思想史などの領域でも活用されることが予想される。

(2) 歴博本『転法輪鈔』に含まれる表白のいくつかについて、詳細な分析を行い、その資料的価値を明らかにすることができた。「帥大納言隆季持仏堂供養表白」からは、藤原隆季が夢を契機に信心をあらたにしたこと、それが表白で表明されることで世間に伝播し、夢を紐帯とする共同体が生み出されていく様子を読み取ることが可能である

ことを明らかにした。また「伊豆堂供養表白」は分析の結果、伊豆の願成就院建立の際の表白であることが判明した。これは今後、願成就院研究に関する基礎資料となると考えられる。

(3) 歴博本『転法輪鈔』に収録されるいくつかの表白が『平家物語』読解のための資料として有効であることを明らかにした。具体的には、平盛子・若狭局・藤原実定・藤原修範ら、平家物語に登場する人物、もしくは平家ゆかりの人物に関係する表白に分析を加えた。そこには『平家物語』に描かれない人間関係が読み取れる一方、『平家物語』の人物造形の基盤となるような人物像が表白によってすでに形作られていることが確認できた。表白がその周辺の文学読解に有用であることを具体的に示すことができた成果であると言える。

(4) 松尾寺再興啓白文は、鎌倉時代後期に松尾寺を復興した際に用いられた表白文で、勸進帳としての機能も果たしたテキストであると考えられる。この本文が歴博本『転法輪鈔』に収録される澄憲の表白を利用して作成されていることを明らかにできた。安居院流唱導資料は鎌倉時代以降、地域・宗派を越えて書写され流布したが、それがどのような意義を持ったか、従来、十分に明らかにされてこなかった。松尾寺再興啓白文の事例を考察することで、安居院流唱導資料がつくりあげようとした世界(堂塔で荘厳された日本国)が、後の時代にもあるべき姿として理想化されていること、安居院流唱導資料の書写と流布が、そのような世界を生み出す原動力として機能していることを明らかにできた。松尾寺再興啓白文という1事例ではあるが、大量の唱導資料が書写されて流通したことの文化的意義について見通しを得ることができた。

(5) 安居院流唱導資料を中心として、そのほかの唱導資料(あらたに公刊された金沢文庫保管の東大寺僧弁暁の説草など)や敦煌願文資料を視野に入れつつ、唱導文献の資料的価値について考察を行った。具体的にはアジア文学の基層を形成するものとして唱導を捉えることができるということ(これにより「日本文学」を相対化できる)、唱導資料を通して中世文化のカテゴリーを分析できることを主張した。また、唱導とその資料をメディアとして捉えることで、それが果たした社会的機能を分析していくことが可能であることを示すことができた。唱導資料論は、まだ発展段階にあるが、今後、唱導資料を読解・活用していくための大まかな指針を示すことができたと思う。

(6) 唱導資料を視野にいれた延慶本『平家物語』の注釈的読解を行った。巻十二で建礼

門院の醜聞が語られる際に、インド・中国・日本における後の密通の事例が列挙されるが、この部分を唱導との関わりから読み解いた。また、延慶本『平家物語』に詳細に描かれる後白河法皇の「御心中」は、表白によって形作られた可能性があることを指摘できた。『平家物語』は表白によって生み出された人物像を吸収して成立していると考えた。このほか、『平家物語』は唱導という営みが生み出した文化と、法会の場における言葉をふんだんに取り入れるなかから生まれてきた物語であることを示すことができた。これらの成果は『平家物語』という物語の新たな一面を示すものと位置づけられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

牧野淳司、表白論の射程 寺院文化圏と世俗社会との交錯、アジア遊学、勉誠出版、査読無、174号、2014、掲載頁未定

牧野淳司、安居院流唱導資料の流布と活用 転法輪鈔と松尾寺再興啓白文、國學院雑誌、査読無、114巻11号、2013、397-410

牧野淳司、歴博所蔵『転法輪鈔』「堂供養下」帖が描く末世の群像、軍記と語り物、査読有、49号、2013、42-52

牧野淳司、唱導資料が開く世界、仏教文学、査読無、36・37合併号、2012、33-49

〔学会発表〕(計3件)

牧野淳司、唱導文献研究のために、第3回明治大学高麗大学校国際学術会議、2012年9月14日、於韓国高麗大学校

牧野淳司、仏教儀礼テキストの研究、第2回明治大学高麗大学校国際学術会議、2012年1月26日、於明治大学

牧野淳司、唱導資料が開く世界、仏教文学会、2011年5月29日、於東洋大学

〔図書〕(計2件)

延慶本注釈の会編(共著)、延慶本平家物語全注釈第三末(巻七)、汲古書院、2013、683

延慶本注釈の会編(共著)、延慶本平家物語全注釈第三本(巻六)、汲古書院、2012、601

〔産業財産権〕

なし

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

牧野 淳司(MAKINO, Atsushi)

明治大学・文学部・准教授

研究者番号: 10453961

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし